



西村 秀一 Nishimura Hidekazu

仙台医療センター臨床研究部ウイルスセンター長

1955年山形県新庄市生まれ。84年山形大卒。米国疾病予防管理センター(CDC) 客員研究員、国立感染症研究所主任研究官などを経て、2000年より現職。専門は呼吸器系ウイルス感染症、特にインフルエンザ。

アクセルを踏んだ人間は ブレーキも踏む義務がある

米

国CDCのインフルエンザ部門に留学していた1996年、西村さんはパンデミック対策を考える上で欠かせない二つの名著に出会う。一つは、1918年のインフルエンザ(スペイン風邪)の世界的大流行を歴史的な視点で描いたクロスビーの『America's Forgotten Pandemic』。もう一つは、1976年に米国で起きた「豚インフルエンザ騒動」をハーバードの教授らが検証した『Epidemic That Never Was』。

帰国後、多くの人にパンデミックに備える意識を持つてもらおうと『America's』を翻訳・出版(邦題『史上最悪のインフルエンザ』)。続いて『Epidemic』の翻訳作業に取りかかった。豚インフルエンザの脅威から国民を守ろうとワクチンの大規模接種を実行したものの、パンデミックは起こらず「多大な副作用訴訟だけが残った」とされる米国の事件の教訓も、広く知らしめるべきと考えたからだ。「パンデミック対策のアクセルを踏んだ人間は、ブレーキも踏む義務があると思ったんです」

ところが、4年以上かけて翻訳出版直前までこぎ着けたこの春、偶然にも豚インフルエンザの大流行が発生。プレパンデミックワクチンの事前接種まで行おうとする日本の突出した新型インフルエンザ対策への「アンチテーゼ」としての目的もあつた出版計画が一瞬揺らぎかけた。しかし、すぐに「この本には普遍的意義がある」と思い直した。実際、豚インフルエンザの流行を機に、行き過ぎた対策を見直す機運も高まっている。

「これまでの対策は、高い致死率のインフルエンザのイメージが強く出ていたところがあり、私も『鳥、鳥と言っていると豚が来るぞ』と言っていました。だからといって軽いものばかりを考える『蛮勇』もよくない。常にバランスよく見ることが大事なんです」

寺

田寅彦の「正當にこわがることはむつかしい」を合言葉に、宮城の仲間とともにパンデミック対策を訴えてきた。その一方で、発熱外来などでの医師への感染を気流で防ぐ「クリーンブ

ース」の開発も手がけた。

二つの大著の翻訳の合間にも、娘さんの習い事の待ち時間などを利用して、米国で人気のあるコワソンの絵本を翻訳。1918年のパンデミック時の日本の状況を記録した内務省衛生局編『流行性感冒』の出版にも協力した。「結構、世の中に貢献しているでしょ(笑)」邦題『豚インフルエンザ事件と政策判断』は、9月に上梓される予定だ。



上:SARSが流行した台湾を視察(前列右から2人目が西村さん、同3人目が台湾大病院長)。左:訳本より『史上最悪のインフルエンザ』と、オバマ大統領も称賛するコワソンの「ヒッポ先生シリーズ」